

北陸大学図書館報

NO.54



◆◆ 第22回読書感想文・第4回書評コンクールと 第5回ビブリオトークを終えて ◆◆

図書館長・薬学部教授・読書感想文・書評コンクール審査委員長

鍛治 聡

このたび第22回読書感想文・第4回書評コンクールが実施され、最終的に読書感想文268編、書評53編の応募作品があり、昨年度から応募件数が97件増加しました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞1名（読書感想文）、優秀賞4名（読書感想文）、佳作5名（読書感想文4名、書評1名）、努力賞18名（読書感想文14名、書評4名）の計28名を、各学部1名ずつの図書館委員4名と図書館事務課1名の計5名で選出させていただきました。次年度もより多くの作品が寄せられることを期待しております。皆さん一人ひとりの作品を読ませていただき、あらためて読書で疑似体験することで得た心情・思考を自分の文字で発信することが如何に大切かを改めて認識しました。

表彰式・ビブリオトークを令和4年12月21日（水）図書館4階ソフィアルームにて開催いたしました。今回は、コロナ禍に加えて週明け早々の降雪の余波が残るなか、参加者を制限して何とか表彰式及びビブリオトークを対面で実施することができました。

ビブリオトークは、読書への思いがあふれるものでした。作品を振り返ると、本を通して多様性に対する疑問が解決に繋がったという読書の効果を示してくれた作品、私見ながら学生生活を振り返り冒頭の文章にとっても共感を覚えたうえにチェンジ&トライという気持ちが込められた作品、病気を経験した女性の記事から自分で決めるという自己選択を強烈に表現してくれた作品、そして痛烈に“伊勢物語”を読みたいと思わせてくれた作品、“本もの”について溢れる個性で語ってくれた作品などでした。あらためて読書を楽しむ習慣が身につけていることに感心した次第です。

最後に、作品の受理や集計に関わってくださった図書館課事務課職員の皆様、そして応募作品を真摯に評価してくださった審査委員の皆様にご挨拶いたします。ありがとうございました。

◆◆ 第22回読書感想文・第4回書評コンクール表彰式 ◆◆



◆◆ 第5回ビブリオトーク開催 ◆◆

令和4年12月21日(水)、第22回読書感想文・第4回書評コンクール表彰式の後、第5回ビブリオトークを行いました。ビブリオトークでは、最優秀賞・優秀賞受賞の学生が、自分の選んだ本について、その本を読んだきっかけや本の内容などを熱く語りました。

とてもなごやかな雰囲気の中行われ、学生たちが読書を通じて学び、成長した様子がうかがえる良い機会となりました。



◆◆ 読書感想文・書評コンクール入賞者が読んだ本 ◆◆



入賞者が読んだ本は、本館（太陽が丘）に所蔵していますので、是非、読んでみてください。
(薬学部分館は一部所蔵しています。)

第22回読書感想文・第4回書評コンクール 審査結果発表

応募作品321（読書感想文268・書評53）編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞（読書感想文の部）

宮崎琴音さん 自分と他人の靴を好きになる (薬) 4年

優秀賞（読書感想文の部）

越田開成さん Turn disaster into good fortune (薬) 4年
 中澤英樹さん 心の在り方、ヒトの在り方、ワタシの生き方 (薬) 3年
 辻谷侑海さん ことば (薬) 1年
 近吉鈴蘭さん 『豆の上で眠る』を読んで (医) 1年

佳作（読書感想文の部）

神門宏香さん 彼女の選択を通して (薬) 3年
 本瀬麻耶さん これからの考え方 (薬) 1年
 辰巳陽菜さん 優しさとは。 (医) 1年
 中多萌さん 『神様のカルテ 2』を読んで (医) 1年

佳作（書評の部）

吉田有里さん 日本社会と米国の関係性 (国) 3年

努力賞（読書感想文の部）

市輪龍之介さん 絶望の先に見えたもの (薬) 1年
 奥村桃花さん 生きた証 (薬) 1年
 乙崎葵さん 暮らしの質を高めること (薬) 1年
 茶本直輝さん 『パラドックス13』を読んで (薬) 1年
 濱谷紗弥さん 自分が楽しく生きるには (薬) 1年
 橋馬健人さん つまらないをおもしろがる (経) 3年
 山下泰昂さん 考えるべきこと (経) 3年
 松田桃子さん 何者 (経) 2年
 岸田華実さん 「人でなし」が意味するものとは (医) 1年
 下出望央さん 『羊と鋼の森』を読んで学んだこと (医) 1年
 中本彩さん 『コーヒーが冷めないうちに』を読んで (医) 1年
 三浦菜知由さん 思考することに弱点はあるのか (医) 1年
 宮村彩衣さん 『そんな軽い命なら私にください』を読んで (医) 1年
 吉野莞介さん 死んだように生きた人 (医) 1年

努力賞（書評の部）

野崎美輝さん 世論に流される危険性 (薬) 2年
 高村勇氣さん 『自分を整える』を読んで (経) 2年
 中村優里さん 外部によって形成される他人種イメージ (国) 2年
 松井彩花さん 心を驚掴みされた本 (医) 1年

ベストタイトル賞

乙崎葵さん 暮らしの質を高めること (薬) 1年
 （書名『フランス人は10着しか服を持たない』）

* (薬) は薬学部、(経) は経済経営学部、(国) は国際コミュニケーション学部、(医) は医療保健学部です。

最優秀賞（読書感想文の部）

自分と他人の靴を好きになる

薬学部 薬学科 4年次生 宮崎 琴音さん



書名 ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー
著者 プレイディミカコ
出版社 新潮社

「多様性」という言葉にネガティブなイメージを持つ人は少ないはずだ。個性と生い立ちが尊重されるならば、それは平和な社会と言えるだろう。一方で、多様性を受け入れるには寛容さが必要だと私は思う。残念ながら、私にはまだ多様性を受け入れるだけの器がないと思う。自分の価値観の枠組みを他人にも当てはめてしまい、ひずみが起きてモヤモヤしてしまうことがある。「多様性は大事だ。でもそのなかで生きるの難しい。」これは自分が大人になるにつれ感じた、終わりのない悩みだった。そんな悩みを吹き飛ばしてしまうような、爽やかなメッセージを放つ本との出会いがあった。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は英国の現代社会に根付いている人種や格差問題のなかで逞しく成長していく少年の姿を、その母親がつづったノンフィクション作品だ。ヨーロッパの華やかな印象とは裏腹に、イギリスには今なお階級や人種による区分け意識が残っている。主人公は日本人の母親とアイルランド人の父親をもつ少年だ。彼は小学生時代を教育ランキングトップの名門校であるカトリックの小学校で過ごし、中学校進学タイミングで地元公立の「元底辺中学校」に進学することになる。「元」というのは、何事もものびのび取り組ませる校風が功を奏して最近成績が上がっているからである。その勢いのある空気感が少年と母親の心をつかんだ。貧しい家を含め様々な家庭環境の子供たちが通う地元公立の学校で、少年は偏見や差別を目の当たりにする。差別的な言葉を向けられるのは少年も例外でない。「イエローでホワイト」という両親のルーツを持つ主人公が「ブルー」という悲しみと怒りの感情を抱くところからストーリーが動き出す。

私が日本で過ごしてきた21年間で、人種や階級による差別を意識したことはほとんどない。しかし、少年が過ごすイギリスの環境ではあからさまな差別が存在する。まず、東洋人だと分かれば道端で「チンク」などと差別的な発言を受けてしまう。加えて、階級によって住む場所もはっきりと分かっている。そこで過ごす人々は、幼いころから人種や階級の問題と向き合いながら暮らしているのだ。「日本の方が平和だな」と感じてしまう。

でも本当にそうなのだろうか。そんな疑問が私が初めて持ったのは奇しくもこの少年と同じく進学したタイミングだ。私の高校時代は、主人公の通ったカトリック校のように小奇麗に整えられた環境で、皆が他人に構いなしの勉強漬けの日々だった。それが大学に入ると空気が変わった。私は高校時代までに培った自分の価値観やポリシーをそのまま持ち込んで入学した。そして、盛大につまずいた。私たちは大学に入るまでの時間をバラバラな環境で過ごしており、バックグラウンドや人生の目標、重きを置くところ、抱えているものがそれぞれ違う。世の中には自分と全く違う思いをもって過ごしてきた人たちがいることを痛感した。そして自分の考えを素直に、さも当然かのように言うことが怖くなった。あまりにも自分は知らなすぎた。多様性を前にして、どうすればいいのか困窮した。この本にはそんな「多様性」の価値について踏み込んだ会話が出てくる。

「多様性ってやつは物事をややこしくするし、喧嘩や衝突が絶えないし、そりゃないほうが楽よ」「楽じゃないものが、どうしていいの?」「楽ばっかりしていると、無知になるから」(本書59頁より)

ハッとする思いだった。似た人たちに囲まれていけばそれはもう、明らかに楽なのだ。しかし世界は多様な人で溢れているのも事実である。そこから目を背けていたら無知になる。無知にならないために私たちは多様性と向き合っているのかもしれない。

少年はライフ・スキルのテストで「エンパシー（共感）」とは何かを書く問題が出たと話した。なんて書いたんだ、と両親に聞かれると「自分で誰かの靴を履いてみる」と書いたと話す。(本書73頁より)なるほど、と私は思った。エンパシーとは「自分と異なる人に対してその立場を想像して誰かの感情や経験を分かち合う能力」のことだ。エンパシーと似た言葉で、「シンパシー」という言葉がある。こちらは「かわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似た意見を持つ人に対して抱く感情」のことらしい。共感、共感と私たちはよく使うが本当にそれは「エンパシー」なのだろうか。元をたどるとエンパシーはかなり難易度の高い知的作業に思える。少なくとも

私は共感という名の感情状態（シンパシー）で過ごしていたと思う。

日本は民族的に多様性に欠け、「同じである」ことが当たり前の状態だ。それゆえ、少しでも自分と違う立場や考えがあると自分が否定されているような気持ちになって反撃しようとしてしまう。もしくは、ぶつかることを極端に避けてしまう。それは表面上では争いがなく平和に見えるかもしれない。だが、私たちは紛れもなく、それぞれが「違う人間」なのだ。あらゆる能力、環境を抽出してつくられた「平均的な人間」なんて存在しない。だから過剰な同調圧力、人との違いを恐れる心はその人の人生や行動を不自由にしてしまうと考え。違いについて海外ほど考えさせられる場面は少ないかもしれないが、同じであろうと努力するのではなく、他人の考えを拒絶するのではなく「自分の靴」も「他人の靴」も大事にしたいと強く思った。楽だからといって相手との違いから目を背けてはいけない。相手のことを知らなければ、相手がどんな靴を好んでいるのかさえわからないのだから。

私はこの本のことをよく知らずに読み始めた。身の回りの問題と向き合いながら成長していく少年の話がノンフィクションと知って驚いた。同時に「人生は小説のようだ。」と感じた。多様な価値観をもつ人々で成り立つ世界の中で、つまずき、転んで、成長しながら旅をしていく私たちの人生はれっきとした小説と言えるだろう。

小説の終盤で少年は「もう自分はブルーではなくグリーンだ」と語る。（本書 251 頁より）グリーンは未熟で、経験が少ないことを表す色だ。それを言うなら私もグリーン。これから熟して色を変化させていく可能性を秘めたグリーンだ。イエローという生まれを持つ人が圧倒的に多い日本で、1 人ひとりが持つ多様性を受け入れながら成長していく。そんなカラフルな人生の 1 日を、今日も悠々と過ごしていきたい。

審査委員講評 **大東 万里絵**（国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科准教授）

様々な国籍や人種、バックグラウンドを持った人々と共生する現代社会にて、多様性ということばが飛び交っている。多様性が大事だとわかっていても、その中で生きるのは難しい、と宮崎さんは素直に述べている。国籍やバックグラウンドだけではない。異なった考えを持つことも多様性のひとつである。同じ価値観を持った人同士だけで暮らす方が確かに楽で衝突も起きづらいだろう。だが、様々な背景を持った人々が社会で共生するのが当たり前となっている時代、まずは相手の意見を素直に聞いてみる、自分の考えと違っていても受け入れてみる、この姿勢こそがとても大切である。この本にも書いてある通り、人のアイデンティティも一つである必要もないのではないだろうか。宮崎さんが言うように、「人はみな違う人間であり、同じであろうと努力するのではなく、他人の考えを拒絶するのではなく、相手をただ受け入れる。」“Put yourself in someone’s shoes” は直訳すると「誰かの靴を履いてみる」、もし自分を相手の立場に置いてみることでできたのなら、世界はもっと平和になるだろうに、と考えさせられる。

優秀賞（読書感想文の部）

Turn disaster into good fortune

薬学部 薬学科 4 年次生

越田 開成さん



書名 恋文の技術
著者 森見 登美彦
出版社 ポプラ社

大学に在籍して 4 年目になるが、周囲に期待されていたことは何もやっていないと断言しておく。大学生の本分たる学問を忘れ、ゲームに没頭し、勉強とは関係のない本を読み漁り、さりごとでそれらを何かに活かそうとするわけでもなくただ惰性で日々を生きている。おかげさまで私の成績は低空飛行である。かろうじて墜落は避けられてはいるが、近いうちに墜落し、京都の大文字山のごとく、金沢の卯辰山かそこの山に「小」の文字を刻み付け、小文字山とし、金沢の別名である小京都を名実ともに不動のものとするのはだれの目にも明らかであろう。

先日、石川県立図書館が新しくなったとのうわさを聞き、早速見学してきた。歩いていると、石川県を舞台にした作品の棚に置いてある『恋文の技術』という本が目にとまった。繰り返すが、私は何の彩りもない学生生活を送っている。この時の私は、バラ色の学生生活というものに対し狂気じみた妄執を抱いており、『恋文の技術』という題名から中身を推察し、砂漠の旅人がオアシスを見つけ渇きを満たすかのように、不毛な学生生活に終止符を打

つべく、この本に飛びついた。

「なんだこの本は」それが私の第一声であった。全編が、京都の大学院から遠く離れた石川の実験場に飛ばされた男、守田一郎の送る手紙で構成されていた。相手ごとに手紙が時系列で並んでいたが、相手からの手紙は記されていない。しかし、守田一郎の返信内容からある程度の内容を推察することができた。

結論から述べよう。私はこの本を読んで「自由」とは、「魂の交流」とは、何かを知った。

守田一郎、いや守田氏と呼ばせてもらおう。守田氏が恋愛に悩む親友、小松崎に送った手紙の中にこんな一文がある。「おっばいというものは、なぜそんなにも男たちを右往左往させるのであろうか。

あんな、ちょっとしたふくらみに過ぎないものが、なぜ男の理性を支配するのか。まったく理解できない。理不尽である。不条理である。これは何かの呪いであろうか。おっばいは我々の目前にデンと居座り、我々の精神を束縛する。我々はおっばいに目を曇らされている。おっばいは世の事実を覆い隠している。これは自由を求める戦いなのだ。おっばいによる支配を一掃してこそ、真に人間と人間による魂の交流が可能となる。我が手に自由を！」

(本書130-131頁より)といった内容だ。「嗚呼、なるほど。」一言、無意識のうちに漏れ出ていた。青天の霹靂だった。私が夢見ている学生生活は、許された自由の中から、選択した夢だと、そう信じてこれまで生きてきた。しかし、本当にそうだろうか。私は、男の理性を支配する凶悪な呪いによって惑わされ、バラ色の学生生活という現実とはかけ離れたありもしない架空の夢を見ていたのかもしれない。つまるところ、私は自由などではなく、奴隷であったのだ。

「気づきを得たならば己を改めるところから」これは、高名な昔の偉人の言葉などではなく、越田開成たる私が今思いついた言葉だが、過去の偉人たちの中で何人かは似たニュアンスの名言を残しているだろうことは想像に難くない。——話がずれたが、この呪いに打ち勝つこと。これが私の直近の課題となろう。呪いに打ち勝ち、真の自由を手に入れることが、私の求める学生生活、ひいては真の人間と人間による魂の交流につながるであろう。

この呪いは内から生じている。ならば己を変えるしかない。という結論に至りかけたが、三つ子の魂百までということわざがあるというのに、生まれて二十二年と少ししかたっていない私が変わるなど到底無理というものだろうと思い、あきらめた。

ならば考え方を変えよう。この呪いに逆らわず、流れのままに行くことこそがもしかすると近道なのかもしれない。守田氏は自由を求めた。しかし、よくよく思い起こしてみると、私はこの呪いによる支配に対して、そこまで悪い感情は抱いていないのだ。いっそのこと心地よいとさえ感じている。

「Turn disaster into good fortune(災い転じて福となす)」という言葉があるように、呪いに身を任せることで、いつかこの呪いが転じて祝福となり、愛が生まれるのではないか。それこそが、真の人間と人間による魂の交流になるのではないか。

あとはこのまま一步を踏み出すのみ。守田氏にならい、手紙という手段を選ぶことにした。

ここで気づいた。そもそも相手がない。

審査委員講評 南谷 直利 (経済経営学部教授)

「Turn disaster into good fortune (災い転じて福となす)」に込められた著者の想いを講評したい。

対面行事が少なく、コミュニケーション力が低下したのではないかと不安に日々を送る学生もいたのではなかろうか。著者は読書感想文・書評コンクールへの参加のみならずビブリオトークにも参加し、そこで学生に対して学内外の図書館をより多く活用してほしいと訴えかけた。それは図書館に足を運ぶ学生視点に基づいてである。

前図書館長の竹井先生が「全国の学生の読書時間が減少している」という調査結果に基づいて見直しをし、本コンクールの継続開催を行った。コロナ禍の窮屈な学生生活において、著者も周りの学生に読書活動を奨励しているように見受けられた。

『恋文の技術』の原作者である森見登美彦氏が、作品発表前にご結婚されていたそうである。この本の表紙にも一人の女性の絵が描かれている。学生恋愛から婚姻に結び付くこともある昨今、作者のリアル感のある描写表現からも、学生は豊かな人間性の一端を学ぶことができるのではなかろうか。

今では懐かしい「恋文」という題材を選び本コンクールに投稿した著者に共感した。一般的に学部生・大学院生時代の人のとの出会いは、人生を創る大切な時期であろう。花嫁のれんで有名な能登を舞台にしたことで一層親しみが感じられた。

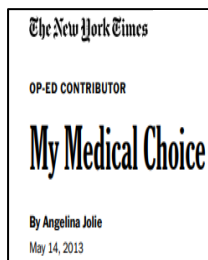
ぜひ、皆さんも時には手紙などを用いて人と交流してみたいかがだろうか。「自由」と「魂の交流」の本質を求めて。



優秀賞（読書感想文の部）

心の在り方、ヒトの在り方、ワタシの生き方

薬学部 薬学科 3年次生 中澤 英樹さん



書名 My Medical Choice[新聞記事]
著者 ANGELINA JOLIE
出版社 The New York Times

「強い」

この記事を読んで、私はそう眩かざるを得なかった。眩しいとすら感じられた。一見、場違いな感想ではあるかもしれないが、私の中ではこの言葉が1番しっくりと来た。

ある分岐点においてアンジェリーナ・ジョリーは1つの選択を行った。彼女の選択が、正しいのか間違っているのか、その答えは簡単に見つかるものではない。もし仮に見つかるのであれば、彼女自身の中だけであろう。彼女の周囲に飛び交う声はあくまでも、憶測であり、彼女ではない者の尺度でみたもの見方でしかない。だが、多種多様な意見がもたれ、様々な議論が行われたのも確かである。この雑多の声が響く中で、彼女は選択を行ったのだ。私は、その選択を行った彼女の、「在り方」をととても強いものだと感じたのだ。

私は、ヒトがヒトであるための根源は、自分で選択肢を選び取ることにあると考えている。ごく当たり前のことの様ではあるが、決して容易なことではない。自身を渦巻く環境や異なる価値観を持ちよる人間関係、世間という名の同調圧力など、自由に選べるようで、その実、不自由でしかない場面など、この人間社会ではありきたりな光景であろう。その中で、自分の意思と考えを持ち、それを行動に移した結果として得られる「選択」と名付けられる行為。私はこれをちゃんとできるヒトに対して、強いと思わざるを得ない。強いのは、そのヒトの意思であり、考えを貫く覚悟であり、選択に伴って訪れる結果を受け入れようとするその心である。

私には、その覚悟が足りていない。だからこそ、強いと感じた。

その上で、彼女は自分の選択を、他人に同様に言うことを強いることはしなかった。だが、このような選択を行うことができる、この様な世界もあるのだと、世界の幅を広げて見せた。だからこそ、私は眩しいとすら感じたのだ。

異なる世界の話であると、自分には縁遠い話であると、心の奥底で感じていたからこそ、そう感じてしまったのかもかもしれない。だが、それは大きな間違いであった。

そう遠くない未来のうちに、私は医療従事者となる。もしかしたら、アンジェリーナ・ジョリーのような患者さんに対して薬剤師という立場から、私に対して何かしらの助言・提言を求められるかもしれない。その可能性は決して低くはない。むしろ、彼女が見せたその強さから、この可能性は飛躍的に上昇したとも考えられる。前例のケースで言えば、彼女の選択に対して、医療従事者からは、「遺伝的にガンになる可能性が高いというデータがあるからと言って、そのような手術を行うことはやりすぎなのではないか」という意見が多数寄せられていた。私もこのような意見と同じくしてアドバイスをすべきなのだろうか。

もし、私がそのような言葉を送った場合、それは誰のための言葉にと捉えられるだろう。患者さんのため、家族のため、自分のため、所属する組織のため。恐らく純粋にその患者さんのためとは、患者さん自身には受け取ってはもらえないだろう。何故なら、その言葉が患者さんの心に寄り添っていないからである。彼女の心の根底には、ガンに対する恐怖心があり、家族と過ごす時間を何よりも大切にし、長くを共にしていきたいという気持ちが強くあった。この原動力こそが、彼女が発揮した強さであり輝きの源なのである。これを無下にし、あくまでもの一般論で片付けてしまうことは、私は間違っていると思った。

そのヒトの心は、そのヒトだけのものである。それがそのヒトを構成し、選択という形で表にでてくる。そうして初めて、他人に伝わるのである。「これが私である」と。

私は、医療従事者とは、ヒトの人生を支援する者であり、ベクトルの向きを変えるのではなく、ベクトルの大きさを変える存在であると考えている。だからこそ、送るべき言葉は、相談者の価値観や背景に寄り添ったものであるべきだろう。

今回の記事を読んで、私には、アンジェリーナ・ジョリーの様な強さや輝きを出すことはできないかもしれない

とってしまった。しかしながら、それらを持ち得る者と出逢った時、その者が支援を必要としている時、私はそれに応えられる存在でありたいと、そう思えた。意図せず、チーム医療の役割と同等なものになったことに、少しの驚きと納得と、笑みがこぼれた。役割を完遂していくためには、多くの知識や技術、経験が必要となってくるだろう。私はまだまだ青い。大学生のうちに、このように目標ができたことは幸運とも呼べるかもしれない。

恒星でないのであれば、恒星ではないなりに、よりその光を、強さを、引き出させるようにしていきたいと、そう思えた。

審査委員講評 畑 友佳子 (薬学部助教)

本作品は、薬学部の講義課題であった。2013/5/14 付ニューヨークタイムズ、女優アンジェリーナ・ジョリーの「My Medical Choice」という記事に対する感想文である。課題であるから当然、同様の感想文を多数目にしてきたが、彼の作品にあったひとつの言葉が選者の心に残った。「医療従事者とは、ヒトのベクトルの向きを変えるのではなく、大きさを変える存在である。」

アンジーの選択について、彼は、強く、眩しいと表現した。確かに、大女優の決断は、彼女自身の強い信念の下、彼女の恵まれた境遇に支えられており、強く、眩しい。そしてそのベクトルの方向は、いかなる医療従事者であっても変えることはできない。

医療従事者の使命のひとつには、正確で客観的な情報を伝えることが挙げられる。一方で、患者のナラティブ (物語) を傾聴し、感情に寄り添い共感し、患者の選択を支えることも求められている。さて自分は、患者が選択に迫られている場面で医療従事者としてどのように振る舞えるだろうか。

優秀賞 (読書感想文の部)

ことば

薬学部 薬学科 1年次生

辻谷 侑海さん



書名 恋する伊勢物語
著者 俵 万智
出版社 筑摩書房

文字に溺れる現代人の感覚からすればおそろしく少ない文字数である三十一文字。何かを人に伝えるにはとても短く感じる三十一文字。その限られた文字数の中でどのような言葉を使い、どれだけの思いを込められるのだろうか。

『伊勢物語』と聞いて高校の古典の授業を思い出す人はいないだろうか。歌物語というジャンルを代表する『伊勢物語』には、一つの段に必ず短歌が登場する。第九段の東下りにある「唐衣着つつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」や第八十二段の渚の院にある「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。この二首は今でも記憶に残っている。というのも短歌の魅力の一つにリズム感というものが挙げられる。特に「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という首を初めて口に出して読んだとき、その音と響きがずっと心に入り込んできて、いわゆる普通の文章を読むよりもずっと理解がしやすかった。今と言葉のニュアンスや意味が違うという点を考慮してもこの語感には人々を魅了する何かがあるんだなと思ったきっかけだった。

『恋する伊勢物語』という題名の通り、『伊勢物語』には多種多様な恋愛が題材とされている。また、百人一首でも約半数を占めるのは恋に関する歌である。いつだって人々を魅了してきたのは愛という感情なのかもしれないなと自分なりに思った。いやいや古典の授業を受けた人も少なくないと思うが、現代と変わらない人間関係の話だと思えば、古典文学の中にも楽しさを見出せるのではないだろうか。ここでは筆者の解釈とともに私の心に残った歌について一首紹介したい。

「形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを」

「あなたが私にくれた物だと思って、大切にしてきた品々。けれど、今となってはこれらがかえって仇と思われま

す。なんのあとかたもなく消えてくだされば、忘れることもできるでしょうに。なまじこんな物が残されているから、あなたのことを思い出してしまうのです……。」(本書 240 頁より)

この話では物の与える力について記されている。思い出の品を捨てるということに葛藤する現代人も少なくないではないだろうか。作中で筆者は、「いずれは忘れるにしても、そのスピードは、形見によってぐんと遅くなることは間違いない。形あるモノには、ある種の生々しさが備わっているので、記憶の風化に時間がかかってしまうのだ。」(本書 241 頁より)と残している。捨ててしまえば楽かもしれないけれど、そもそも物がなければこのようなことを考える必要がない。

これとは逆に物ではなく言葉だったらどうだろう。私は言葉のほうが厄介なものだと思う。ものは捨ててしまえばいったんは割り切れるかもしれないが、言葉はずっと捨てることができず心に残り続ける。忘れたと思っても、ある単語を聞くとフレーズが走馬灯のように思い出されることがある。私もこの一例に陥ったことがある一人だが、形あるものよりずっと言葉のほうが人に与える影響は大きいのではないだろうか。

そう考えると幾千もの時を超え、この『伊勢物語』が現代にも語り継がれ、また誰かの心に残り続けるということには納得できる。後世に名を残すものは総じて言葉の持つ力が大きいのだと自分なりに思った。

価値観や社会の在り方は時代によって変化していくものだが、言葉の持つ意味やその美しさは変わらないように思う。どの年代に生きる人々もよい意味でも悪い意味でも言葉に囚われ、言葉に期待してしまう。

同様に、美貌の優劣や物事の善悪などは時代に連れて価値観とともに変化していくものだが、言葉は変わらないと思う。現在のように写真や動画が鮮明に残すことが不可能だった時代だが、もしそれが残っていたとしても言葉の持つ力はとても大きいと思う。

古くから人々に親しまれてきた『伊勢物語』のように、後世に何かしらの自分の生きた証を残したいと思ってしまふ。傲慢な感情なのかもしれないが、この気持ちは忘れずにいたい。

審査委員講評 田邊 良和 (図書館事務課長)

小説などで応募される方が多いなか、現代訳版とはいえ古典を選ばれたことに深い感銘を受けました。

また、作品のリズムや言葉の良さに触れ、様々な視点から読み解いていったところが素晴らしいと感じました。

『伊勢物語』に限らず『万葉集』など、31 字の文字数に込められた作品が長く読み継がれているのは、辻谷さんが述べられているとおり「言葉の持つ力」だと思います。

SNS などが盛んな現代においても、相手の言葉や文字から意味を読み解く力は重要です。

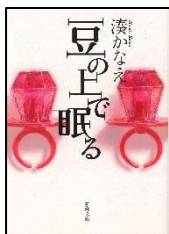
相手の言葉や文字から意味を読み解く力をつけるという点においても、今後もぜひ楽しみながら様々な古典に触れていってほしいと願います。

優秀賞 (読書感想文の部)

『豆の上で眠る』を読んで

医療保健学部 医療技術学科 1 年次生

近吉 鈴蘭さん



書名 豆の上で眠る
著者 湊 かなえ
出版社 新潮社

本ものって、何ですか——。物語を締めくくるこの一言が、頭から離れなかった。

主人公の結衣子には、二つ年の離れた姉、万佑子がいる。活発で運動の得意な主人公とは違い、万佑子は体が弱く外で遊ぶことも満足にできず、大人しい性格だった。二人は性格は似ていないものとても仲が良く、いつも二人で遊んでいた。しかし、万佑子は突然、主人公の前から姿を消してしまう。手掛かりとなるのは、スーパーに残された万佑子の帽子、不審な白い車の目撃証言、変質者の噂。そして、失踪事件から二年後、必死に捜す主人公たちの前に、万佑子を名乗る見知らぬ人物が帰ってくる。再会を喜ぶ家族の中で、主人公だけが大学生になった今でも微かな違和感を抱き続けている。——お姉ちゃん、あなたは本ものなの？(本書裏表紙より)

豆の上で眠る、という独特なタイトルは、本編を読む前から私を引き付けた。このタイトルの意味するところは、

アンデルセン童話のひとつ、『えんどうまめの上ねたおひめさま』からきている。嵐の晩、妃を探すことに行き詰っていた王子のもとに、身なりの貧しい少女が現れる。王子が探し求める「本もののおひめさま」は自分だという彼女を、后妃はベッドに豆を置き、さらに幾重にも羽根布団を敷いた上に一晚寝かせて、その真偽を確かめようとする。(本書 362 頁より)翌朝、后妃が少女によく眠れたかと訊ねると、布団の下に何か硬いものがあったのでよく眠れませんでした、と答える。それを聞いた后妃は、そんなに感じやすいのは本もののおひめさまであると確信し、王子とその少女はめでたく結婚する。(本書 16 頁より)

いかにも童話らしい、平易な内容だが、布団の下の豆ひとつに気付けることがそんなに重要なのかと、読み手に疑問を残す物語である。(本書 363 頁より)

しかし、この童話は主人公の結衣子にとって、帰郷のたびに思い出すほど姉の万佑子との大事な思い出であり、重要な手がかりだった。姉を名乗り、家族として自分の目の前に居座る少女は、私の姉ではないのではないか。それこそ、豆の上に眠るような違和感を抱えながら過ごす日々は、楽しいものとは言えなかつただろう。いつか尻尾を掴んでやる。化けの皮を剥いでやる。本もののお姉ちゃんを返せ、万佑子ちゃんを返せ――。

物語は、一貫して結衣子の視点で、大学生である現在と、小学生のころの過去が交互に描かれる。つらい記憶の中で思い出の中の万佑子ちゃんを必死に辿り、「本もののお姉ちゃん」を捜そうとする主人公の姿が生々しく映し出され、その葛藤や不安がこちらにまで伝わってくるようだった。言葉で表現できないほどの恐ろしい結末が待っている気がして、何度もページをめくる手を止めた。それでもどうにか最終章まで読み進め、最後の一文を読んだとき、最初に感じたのは想像を超える絶望だった。

物語の結末は、こうだ。小学生まで主人公の姉の万佑子として生活していた女の子は、実は主人公とその家族とは何の関係もない、血のつながっていない赤の他人であり、後から出てきた万佑子を名乗る少女こそが真正正銘、主人公と血のつながった姉である。しかし、そのことを知った主人公は、それでも自分にとって本もののお姉ちゃんは小学生までを過ごした万佑子ちゃんであり、血がつながってようがお前は私の姉ではないと言い放つ。血のつながりを重視するものと、過ごした時間を重視するもの。この二つが交わることはない。信じてきたものすべてを裏切られ、嘘をつかれ、騙され、隠された主人公の絶望が、痛いくらいに伝わってきた。

本ものって、何ですか――。これからもその問いの答えを探し続けていこう。

審査委員講評 **服部 託夢** (医療保健学部講師)

物語の様子と自身の感情についてわかりやすく対応付けて示しており、感想文として読みやすいものであった。また、小説が示す間について、自身への問へと変化させており、物語への没入ぐあいや、いかに引き込まれて読み込んだのかがうかがえて大変良く、近吉さんの感想文を読んだ人が本書を手にとってみようと思わせるようなものであった。近吉さんにとって良い本に出会ったのではないかなと思われる。



◆◆ 第 22 回読書感想文・第 4 回書評コンクール受賞者コメント ◆◆

第 22 回読書感想文・第 4 回書評コンクールで、最優秀賞、優秀賞、佳作を受賞した 10 名から次のとおり受賞のコメントをいただきました。



最優秀賞 (読書感想文の部)

薬学部 薬学科 4 年次生 **宮崎 琴音**さん

最優秀賞をいただきました。選ばれるとは思っていませんでした。本を読むことは自分にはなかった視点を得られて面白いのですが、感想文を書くことには「本の良さ」と「内容」を自分の頭で再び組み立てて表現する別の面白みがあると思います。貴重な機会をこうして設けていただきありがとうございました。

(読んだ作品:『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』/ ブレイディミカこ著)



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 4年次生 越田 開成さん

この度は優秀賞に選んでいただき、非常に光栄に思います。私は常日頃から承認欲求に飢え、インスタグラムを用いたインスタントな“満たし”によって飢えをしのいでいました。しかしながら今回、友達に読書感想文コンクールを勧めてもらい、優秀賞を受賞したことで、インスタントな“満たし”ではなく、本当の“満たし”を得ました。ほかの方にもこの“満たし”を体験していただきたいので、読書感想文コンクールへの応募を勧めたいと思います。

（読んだ作品：『恋文の技術』 / 森見登美彦著）



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 3年次生 中澤 英樹さん

この度は優秀賞に選んでいただきありがとうございます。「読書」とは、読者によって様々な意味やストーリーをもたらすことのできるものであると思っています。そこに正解などなく、幾重にも楽しみ、深め、そして広げられるものであると。読書を通して、より多くに触れ、より自分ならざる視点をもっていければと思っています。ありがとうございました。

（読んだ作品：My Medical Choice [新聞記事] / ANGELINA JOLIE 著）



優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 辻谷 侑海さん

今回このような賞をいただいて感謝でいっぱいです。物心ついた頃から読書が好きな子どもでしたが、読了後に思ったことや感じたことを書き記すことは減多になかったように思います。この読書経験を通して言葉が持つ意味を改めて強く実感した今、自分だけがわかるようなものでもいいからとにかく何かを書いてみようと思うようになりました。これからの読書にも今回の学びを活かしていきたいです。本当にありがとうございました。

（読んだ作品：『恋する伊勢物語』 / 俵万智著）



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部 医療技術学科 1年次生 近吉 鈴蘭さん

この度は優秀賞をいただき、光栄に思います。今回のコンクールを通じて、本を読むことのおもしろさを改めて感じました。昔から続いている読書の習慣を、これからも続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

（読んだ作品：『豆の上で眠る』 / 湊かなえ著）



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 3年次生 神門 宏香さん

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。私は、授業の中で提示された文章について感想文を書きました。筆者の状況や選択を自分なりに解釈し、その中で自分だったらどのような決断を下すのか深く考えることができました。文章を読むだけでなく、それを通して自分と向き合ういい機会を得ることができました。ありがとうございました。

（読んだ作品：My Medical Choice [新聞記事] / ANGELINA JOLIE 著）



佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生 本瀬 麻耶さん

この度は佳作に選んでいただき、ありがとうございました。私は神経質なところがあり大学生になってから何度も自分を責めたり落ち込んだりしてきました。そんな時に何気なく手に取った本が自分の内面を見直してくれました。神経質な部分を変えることはできなくても考え方を変えることで神経質を武器にできると思います。これからも本を読み新たな発見をしていきたいです。ありがとうございました。

（読んだ作品：『スッキリわかる! : 敏感すぎる自分の処方箋』 / 保坂隆監修）



佳作（読書感想文の部）

医療保健学部 医療技術学科 1年次生

辰巳 陽菜さん

この度は佳作賞に選んでいただき、ありがとうございます。この本を選び自分の中で大きく価値観が変わった瞬間を皆さんにも共有したく読書感想文を書きました。

この本に限らず自分の価値観や考えを覆す本にこれからも出会いたいと思います。読書通じて皆さんも素敵な考え方を一緒に身につけていきましょう。

（読んだ作品：『フォルトゥナの瞳』 百田尚樹著）



佳作（読書感想文の部）

医療保健学部 医療技術学科 1年次生

中多 萌さん

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。

私は、この作品を通じて、自分の“良心”に従い思い描いた未来を歩むことの難しさと、そのような状況でも自分の理想を叶えるためにすべきことを学ぶことができました。

この作品は、タイトル通り病院を舞台にした話ですが、個性豊かな面々が支え合いながら懸命に働く姿は、将来どの分野で活躍するにせよ、胸を打つものがあるのではないのでしょうか。もし、機会があれば読んでみてください。

（読んだ作品：『神様のカルテ 2』 / 夏川草介著）



佳作（書評の部）

国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科 3年次生

吉田 有里さん

この度の書評コンクールにおいて、佳作を受賞できたこと大変嬉しく思います。この本は題名の通り「日本人とは何か」を深く考えるきっかけを与えてくれました。久しぶりに本を手にとると新しい気づきや考え方など多くの発見があり、書評を書くことを通じて自分の考えをより洗練でき熟考できたと思います。これからも時間があれば積極的に本を読んでいきたいです。この度はありがとうございます。重ねて御礼申し上げます。

（読んだ作品：『「日本人」をやめられますか』 / 杉本良夫著）

◆◆ 寄 贈 図 書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著	計	寄贈者
『医師偏在と地域経済：北海道からみた過疎医療問題』	計1冊	清水 芳行（医療保健学部教授）
監修・分担執筆		寄贈者
監修：『最新図解 よくわかる発達心理学』	計1冊	林 洋一 （国際コミュニケーション学部 心理社会学科長・教授）
分担執筆：『キーワードからみる経営戦略ハンドブック』	計1冊	五味 一成（経済経営学部長・教授）
その他		寄贈者
『夜に星を放つ』他	計2冊	泉 洋成（理事）
『マッスルインバランスの理学療法』他	計2冊	大工谷 新一（医療保健学部教授）
『死神と天使の円舞曲』他	計2冊	田邊 良和（図書館事務課長）

北陸大学図書館報 NO.54 令和5年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/library/>

長期ビジョン 北陸大学 Vision50 (by2025) …… 2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる。